

宇治市観光振興計画推進委員会 議事録

日時 令和8年9月1日(火) 10時～12時

場所 JR宇治駅前市民交流プラザ「ゆめりあうじ」4階 会議室1

出席者

宇治市観光振興計画推進委員会

委員長 坂上 英彦

委員 片山 明久

〃 中村 藤吉

〃 山仲 修矢

〃 浅井 栄一

〃 堀井 長太郎

〃 四辻 清美

〃 神居 文彰

〃 佐脇 至

〃 若林 浩吉

〃 下田 千晃

〃 奥野 美奈子

〃 岸田 秀紀

事務局

産業観光部 部長 脇坂 英昭

産業観光部 副部長 前田 聖子

産業観光部 観光振興課 課長 澤田 直子

観光振興課 観光企画係 係長 西井 利治

観光振興課 観光企画係 主任 永井 理帆

観光振興課 観光企画係 主事 吉川 真

関係課

産業観光部 農林茶業課 課長 寺村 仁志

産業観光部 産業振興課 課長 馬場 隆

産業観光部 文化スポーツ課 課長 吉田 知史

建設部 道路建設課 副課長 松尾 賢延

都市整備部 都市計画課 課長 中本 洋

都市整備部 歴史まちづくり推進課 課長 谷澤 潔

都市整備部 交通政策課 課長 勝浦 聡

危機管理室 室長 長澤 祐介

宇治市教育委員会 教育総合推進センター 源氏物語ミュージアム 館長 家塚 智子

資料

- ・宇治市観光振興計画推進委員会 次第
- ・宇治市観光振興計画推進委員会 委員名簿
- ・宇治市観光振興計画推進委員会設置要項
- ・宇治市観光振興計画推進委員会の会議の公開に関する要項
- ・〈冊子〉第2期宇治市観光振興計画中期アクションプラン概要版
- ・【資料】第2期宇治市観光振興計画中期アクションプラン取組状況

1. 開会

2. 委員の委嘱

3. 開会あいさつ

松村市長より開会あいさつ

4. 委員の紹介

5. 委員長互選及び副委員長氏名

6. 委員長あいさつ

7. 報告

事務局より以下について説明

- ・〈冊子〉第2期宇治市観光振興計画中期アクションプラン概要版
- ・【資料】第2期宇治市観光振興計画中期アクションプラン取組状況

委員長：

事務局からの説明に質問等がある方はご意見をお願いしたい。

委員：

茶づなの1年間の稼働実績や動員数は把握しているか。

事務局：

茶づなの令和 7 年度の稼働実績は、歴史公園来園者数 15 万 3325 人、うち入館者数が 11 万 6020 人、ミュージアム入館者数は 5 万 4862 人、講座体験プログラム参加者は 3 万 2498 人である。その他ミュージアムあるいは喫茶レストランなどを利用された方がいらっしゃる状態である。また、施設貸出しは 205 件、貸出し利用人数は 1 万 5987 人である。

委員：

茶づなでは、市民割は導入しているか。また、インバウンドの数は把握しているか。
参考に源氏ミュージアムの実績も伺いたい。

事務局：

市民割は導入していない。国内と海外の内訳も正確な数値は把握していない。

事務局：

令和 7 年度実績は、おおよそ 10 万人ほどが有料の入館者になる。
ミュージアムも、国内外の内訳人数は、音声ガイドの貸出し数で把握しているものになるため、正確な数値は把握していない。

委員：

茶づなや源氏物語ミュージアムの連携パスなどはあるか。

事務局：

ない。

委員：

ニンテンドーミュージアムの実績はどの程度なのか。

事務局：

任天堂より今年の 8 月に累計入館者数 100 万人を達成したという報道があった。

委員：

小倉から中宇治へ向かうバスの利用はどのぐらいなのか。

事務局：

64 バスの利用状況は令和 7 年度実績では 2 万 8500 人程である。令和 6 年度が 1 万 2000 人のため、乗降客数については大きく増えてきている状態である。

8. 議事

委員長：令和 9 年度に向けた取組について、幅広く皆様から御意見を頂きたい。

委員：

動向調査の 7 ページ⑤観光消費額についての表において、【宇治宿泊観光客を除くと、一人当たり平均消費額「合計」は約 400 円程度減少しています。】の記載があるが事務局はどのように原因分析してるのか伺いたい。

事務局：

調査したところは同じですが、このような結果になったということは、令和 4 年度の調査は、コロナの時期のため、母数が少なかったため、特異数値が出た可能性はあるかと思う。

委員：

平成 28 年、令和 4 年、令和 7 年を比較すると、令和 4 年が非常に高く感じた。「コロナの際の調査による数値」との判断も当然あるかと思うが、単価が下がる場合は、滞在時間が短くなるというような理由があると思うので、そこは少し考えてもいいのかなと思う。

委員：

中期アクションプランにおいて、宿泊業者や宿泊施設に関する調査や方針が盛り込まれていない。かつて宇治川両岸には「静山荘」や「花やしき」といった風光明媚で落ち着ける料亭旅館が存在したが、こうしたくつろぎの場が減少している現状は非常に残念である。宇治市内の商店街にホテルができるのも良いが、こうした昔ながらの料亭旅館のような、静かにくつろげる宿泊施設の受入れ体制整備について行政はどう考えているか。極端な例かもしれないが、京都市内のように外資系高級ホテルのような魅力的な施設誘致も含め、宇治川周辺の景観を生かした異なる形での受入れ環境の充実を検討すべきである。

事務局：

資料（中期アクションプラン取組状況）に「宿泊施設」と直接的に明記した項目はないが、宇治橋通り商店街でのホテル新設などの動きは把握している。報告資料（9 ページ等）に記載の「朝から楽しめる観光」や、時間軸をずらした「朝・夜の観光推進」もあわせて進めていく考えである。

「花やしき」については都市整備部門の立場として報道等で認識している範囲だが、大規模な建替え等ではなくリノベーション軸で同種の宿泊施設として検討されていると認識している。現時点で具体的な確定情報はないが、今後開発や風致に関する協議が出てくると考えているため、関係部署等と情報共有を図っていく。

委員長：

質問は単に開発・風致等の規制・手続き上の対応にとどまらず、宿泊業の誘致や受入れ環境の向上に向けた積極的な施策推進を求めている趣旨と理解する。民間地の誘致は、行政が直接行う事業ではなく民間事業となるため、(行政が) どのようにコンタクトを取りアプローチするかが課題となる。京都市内の実情も踏まえ意見を伺いたい。

委員：

宇治市への高級ブランドホテル進出の意向に関する具体的なデータは持ち合わせていないが、京都市内では多様な価格帯(最高級からリーズナブルな層まで) のホテル進出が現在も続いている。京都市内の傾向として、アクセス至便な好立地(御所周辺等) の地価が高騰する一方で、嵐山や高尾等の風光明媚で自然豊かな郊外・離れには「星のや」や「アマン」といった特徴ある高級滞在型ホテルが進出し、高単価・連泊層を誘致している。ホテル誘致の窓口は大手交通事業者や不動産デベロッパーが担っているのが実態である。これらの事業者は常に案件情報を探しているため、行政の窓口や民間金融機関を通じて情報提供や意見交換、サウンディング調査等を実施することは有効なアプローチと考える。ただし、民有地の場合は行政主導の交渉に難しさがある点には留意が必要である。京都市内から宇治市へは1時間以内で移動できる利便性があるからこそ、宿泊してもらうためには単なる1泊ではなく連泊しても楽しめるプレミアム感や滞在価値の創出が鍵となる。

委員：

元外資系ホテルの総支配人や大学教授等との意見交換において、京都におけるホテルは東京や大阪と異なり、コンセプトや内装・構造に「京都らしさ」を強く打ち出すことが求められているとの指摘があった。これは宇治においても同様であり、誘致にあたっては宇治独自の風土・景観・歴史を反映したコンセプト設定が不可欠である。

海外(特に欧米) の旅行会社によれば、旅行者は単なる訪問や宿泊にとどまらず、その土地ならではの歴史や体験、ストーリー性を強く求めている。京都市内の混雑が定着する中、宇治はアクセスが良く、歴史や体験コンテンツが揃った魅力的な次なる候補地となり得る。本プランで掲げる「プレミアム感」を体現するためには、現地でどのような価値ある体験を提供・準備できるかが重要であり、これが結果として宿泊施設の誘致や価値向上につながる。大型施設に限らず、地域の特性に合った一棟貸しの民泊のような小規模でゆったり滞在できる宿泊形態もニーズに適合していると考ええる。

委員：

中期アクションプラン(11 ページ) に掲げるコンセプト「五感で楽しむプレミアムな観光まちづくり」は、平安時代に貴族が別荘の地として宇治で過ごした歴史的背景や源氏物語の世界観とも親和性が高く、非常に適切である。当時の貴族がどのような過ごし方をしていたのか等、歴史的な背景を掘り下げることで、宇治における「プレミアムな過ごし方」の具体

的なイメージやアプローチが見えてくると考える。このコンセプトを実際に形にしていくのは民間の観光事業者であるため、関係者が同じ方向性を目指せるよう、行政としてどのように周知・浸透させていく方針か伺いたい。

事務局：

快適な観光地づくりの一環として、今年度は商店街や鉄道事業者等と「おもてなし推進会議」を開催した。観光客と市民の双方が快適に過ごせるよう、ゴミ問題やタバコのマナー等の課題に協働で取り組んでいる。7月に実施した実証実験の中間取りまとめを踏まえ、秋以降に協議を進め、受入れ体制の整備につなげていく。こうした事業者と行政担当部署との直接対話を通じて、施策の考え方や方向性を共有・浸透させていきたい。

委員：

ゴミ対策等の快適性向上も重要であるが、「プレミアム」という概念には質の高さが求められる。例えば、現代のような娯楽がない平安時代に貴族がどのように宇治で過ごしていたのかといったテーマについて、観光関係者向けにセミナーや情報提供を行うなど、具体的かつ上質な観光推進につながる取組を期待する。

委員：

計画や報告において「プレミアム」という言葉が使われているものの、中間報告の段階では具体的に何を指すのか、どのような取組を行っていくのかが見えてこない。「プレミアム」を軸とした具体的な取組方針や重点施策、実行に向けていくべきである。

DMOとして消費単価の高い外国人観光客の誘致を目指し、京都や大阪の富裕層向けホテルのコンシェルジュと意見交換を行った際、「宇治は近くて良いが、混雑しているイメージがある」との声があった。中宇治等の特定エリアだけでなく、萬福寺、小倉地域、天ヶ瀬ダムなど、多様な観光資源を含む広域的な宇治の魅力を発信・周知していく必要がある。かつての京都市の取組と同様、観光客数「量」の追求から消費額向上「質」へ方針を転換すべきである。「プレミアム」の本質は「自分だけの特別な空間や時間」を提供することにある。山城地域は受入れインフラの規模が限られているからこそ、高単価・上質な層をターゲットに据えるべきである。上質な客層を呼び込み、消費額を高めるための受入れ態勢（プレミアムな滞在施設）を構築も、持続可能な宇治観光の実現につながる。

委員：

観光客数「量」より消費額「質」を重視し、プレミアムな宇治を目指すべきであるが、動向調査のアンケート結果を見ると、京都市内（嵐山・清水・八坂・東山等）と比較して宇治の認知度は未だ低いのが現状である。認知されていなければ誘客につながらないため、「プレミアムな宇治」としての認知度向上と発信力の強化が必要である。宇治橋通り商店街周辺で

は東横インの新設が進んでおり、既存の宇治第一ホテルやホテルトレンドを含め、高い稼働率を維持しているものの、これらはビジネス層を主なターゲットとしている。本会議で議論されている「プレミアムな宿泊」とはターゲットが異なるため、宇治川兩岸の旧来の料亭旅館のような景観を生かした宿泊施設の復活を期待する。

動向調査における「残念だった点」の改善努力がなければ、プレミアムな観光地の実現は難しい。特にトイレやゴミ問題は不満として多く挙がっている。

8月に実施されたゴミ調査等の結果を踏まえ、令和9年度に向けた実効性のある改善策を講じることが極めて重要である。

委員：

宇治川兩岸等へ上質なホテルを本格的に誘致するためには、民有地であっても土地所有者と協働し、デベロッパー向け意見交換会の開催や直接的な事業者訪問（売り込み）を市主導・協働で実施していく必要がある。

また、平安貴族による観月等の歴史的文脈を背景とした、プレミアムな体験プログラムの開発が不可欠である。観光庁の補助金等を活用して高付加価値な体験コンテンツを開発・試行し、富裕層を扱う旅行者へ提案していくアプローチが必要である。体験コンテンツの開発と宿泊事業者の誘致を並行して進めることで、事業者の進出意欲を高めることができる。これには時間を要するため、腰を据えた長期的・持続的な取組が求められる。実施中の志津川発電所跡の調査に関連し、耐震性等の条件がクリアできれば、近代化産業遺産を活用した宿泊施設開発といった可能性も視野に入る。こうした地域資源の活用可能性も含め、事業者との対話・意見交換を精力的に重ねていくべきである。

委員：

日没後の夕刻に限定客を招き、尺八演奏と解説付きで案内する企画や、京都市内の高級ホテル（例：三井、ザ・サウザンド京都等）から開館前の早朝7時～9時に小人数グループを受入れ、特別な場所の拝観後にホテルへ戻って朝食をとるような取り組みを既に自発的に実践している。こうした個別の優れた取組や特別な体験提供を、いかに宇治市全体の取り組みとして波及・展開させていくかが課題である。

新名神高速道路の開通や周辺エリアの開発を見据え、奈良等へ逃げる周遊客を宇治へ引き込むためのアクセス整備や案内看板の設置等を中長期的な視点から準備する必要がある。

再来年の「藤原道長 1000 年紀」に向け、平等院とゆかりの深い近衛家等との連携を図り、歴史・文化文脈を生かした情報発信を準備している。動物愛護の観点から世界の評価が分かれやすい従来の鶴飼に対し、宇治の「放ち鶴飼」は世界的に見ても極めて独自性が高く、評価され得るプレミアムなコンテンツである。メディアや広域的な発信力を活用し、世界へ宇治の魅力を伝えるキラーコンテンツとして「放ち鶴飼」をアピールしていくべきである。

委員：

中期アクションプランにおいて多数の取組が記載されているが、各取組を実施した結果としてどのような効果が生じたかが見えにくい。令和 11 年度に向け「目標数値 85～90%以上」が掲げられているが、1 年目の現状として取組が目標達成に向け順調なのか、あるいは軌道修正が必要なのかの判断材料が不足している。周遊性の向上等の施策は評価が難しいため、4 年後の最終調査を待つだけでなく、途中で効果検証を行い、方向性を確認しながら進めるべきである。

事務局：

各取組の個別の成果や分析は行っているものの、計画全体の数値目標達成度については「4 年に 1 度の動向調査」の結果に基づいて最終判断するフレームワークとなっている。施策ごとに中間的な数値確認が十分にできていない項目がある点は認識しており、重要施策の実施にあたっては途中で方向性の確認や評価を行いながら推進するよう努める。

委員：

旅行会社の視点として、京都市内等から宇治へのアクセスにおいて、検索上は 30 分だが、実際には渋滞で 1 時間近くかかるケースが多く、ツアー企画・手配の懸念点となっている。他自治体（奈良市等）のように交通渋滞対策の実証実験を行うなど、交通アクセスの見直し・改善を図ることが宇治の観光評価の向上につながる。宇治の強みである「宇治茶」のコンテンツ拡充にあたっては、あれこれ手を広げるよりもテーマやターゲットを一つに絞り込んだ訴求が効果的である。

委員：

市が目指す「プレミアムな観光」の方向性には賛同するが、地元の民間事業者（特に中小企業）がそれに向けた設備投資等を行うには大きなリスクとコストが伴う。行政には、事業者が新たな取組や投資を行いやすくなるよう、各種許認可や相談体制などの便宜・サポートを期待する。国内大手交通・不動産事業者にとっても高級ホテルの自社開発は容易ではないため、市が明確なビジョンを掲げ、民間が参入しやすい環境・枠組みを整えることが重要である。

委員：

「プレミアムな宇治」が狙うべき客層は、「超富裕層」ではなく、一定の購買力を持つ「アッパーマス層」が最も現実的かつ適している。他地域との競争に勝つためには、ゴミ・トイレ・交通混雑といった基本的な課題をクリアし、清潔で歩きやすいまちづくりを進めることが前提となる。京都市内からのアクセスは強みである一方、「通過型観光」になりやすい弱

点でもある。夜間コンテンツで京都市内と競うのは困難であるため、広域的な交通インフラの整備や平等院や萬福寺等の文化財連携、ニンテンドーミュージアム周辺を含めた回遊性の向上と多言語対応が重要である。

委員長：

「プレミアム」の提供は、行政が不得意とする部分が多い。ただし、インフラは行政が得意とする分野であるので、官民の役割分担を明確にしつつ、今回の意見を来年度以降の施策に反映させていくことが求められる。

9.閉会

脇坂部長より挨拶